南山大学ヨーロッパ研究センター報 第32号 *pp.61-70*

# 女性リポーターの冒険
## ―アンドレ・ヴィオリス『アフガニスタンの動乱』について―

外国語学部　真　野　倫　平

### はじめに

アンドレ・ヴィオリス（1870–1950）は20世紀前半のフランスで活躍した女性リポーターである[1]。『プチ・パリジャン』紙におけるアルベール・ロンドルの同僚で、彼とともにグラン・ルポルタージュというジャンルの確立に貢献した。女性ジャーナリストが稀少だった時代に、ヴィオリスは精力的に多くの国に取材に訪れ、10冊のグラン・ルポルタージュを刊行した。『アフガニスタンの動乱』（1930）はその3冊目で、彼女の国際リポーターとしての評価を確立した重要な著作である。

アフガニスタンは19世紀後半にイギリスの保護国となったが、1919年に第三次アフガン戦争に勝利してイギリスからの独立を成しとげた。国王アマーヌッラー・ハーンはヨーロッパ寄りの近代化政策を取ったが、イスラーム聖職者をはじめとする反動勢力の反発を買い、反乱によって追放の憂き目を見た。反乱のリーダーだったハビーブッラー・カラカーニーが政権を奪取すると、首都カブールからのニュースは完全に途絶えた。当時フランスに滞在していた王族で元国防相であるムハンマド・ナーディル・ハーンは、王位簒奪者を打倒するために祖国に向けて出発した。戦いの行方はどうなるのか？

多くのジャーナリストがこのニュースに注目したが、交通の遮断や戦乱の危険のせいで誰もがアフガニスタン行きを断念した。『プチ・パリジャン』紙の記者だったヴィオリスは、ただ一人現地入りの手段を探し求めた。彼女はロシア経由で中央アジアに行き、さらに飛行機でカブールに渡り、ついに現地での取材を成しとげた。このルポルタージュは現地の最新情報を伝えた特ダネ記事であると同時に、優れた政治的分析であり、手に汗握る冒険譚でもある。われわれはこの作品の分析を通して、ヴィオリスのリポーターとしての多彩な才能を検証することにしたい。

---

1　ヴィオリスについては、真野倫平「アンドレ・ヴィオリスのグラン・ルポルタージュ　極東関連の調査を中心に」、『Stella』第43号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2024年12月、251–265頁を参照。

## アフガニスタンへの旅

アフガニスタンはヨーロッパとアジアの交差点に位置し、ゾロアスター、ギリシア、インド、イスラームなど多様な宗教のるつぼであり、近代においてはロシアとイギリスの政治的争点であった。そのアフガニスタンで反乱が起き、首都カブールは反乱軍によって陥落した。戦乱により通信や交通は遮断され、現地入りは絶対不可能に見えた。それでもヴィオリスはソヴィエト外務局に問合わせ、ロシア・ルートなら現地入りが可能であることを突きとめた。陸路でロシアからウズベキスタンのタシュケントに行き、飛行機でヒンドゥークシュ山脈を越えてカブールに渡るのだ。女性一人で現地に入るのは危険すぎると誰もが反対した。「なんだって！　あの人殺しだらけの国に行くって？　野獣が解き放たれているのに？　しかもそこに降りるのに、世界で一番危険な空路を取るって？[2]」ヴィオリスは構わず出発し、10月5日にタシュケントに到着した。タシュケントの外務局職員は彼女の計画を聞いて絶句した。「今カブールに行くって？　ありえない！［…］向こうでは戦争や革命が起き、街なかで殺し合っています。電信もラジオも今朝切れました[3]」（以上第1章）。

ヴィオリスはそれでもタシュケント空港から飛行機でサマルカンドに行き（彼女にとって初めての飛行体験だった）、さらにシロッコ嵐を越えてテルメズに到着した（以上第2章）。いよいよヒンドゥークシュ山脈を越えてカブールに向かう「世界で最も困難で最も危険な飛行[4]」の一つに挑戦だ。出発の前日、彼女は操縦士から「スーツケースはここに置いていくように[5]」と一方的に告げられた。現地の状況次第では空港に着陸できない可能性があるので、引き返すための燃料を確保する必要があるのだ。10月13日早朝、離陸した飛行機の前方にヒンドゥークシュ山脈の巨大な山塊が現れた。飛行機が急上昇を始めると、ヴィオリスは強烈なめまいの感覚に襲われる。「重く厄介な自分の身体から離れて漂っているような感じだった。［…］死とはこういうものだろうか？　私はまだ地上の生者なのだろうか？[6]」この奇妙な仮死状態を抜けると、やがて一気に視界が開け、下方にカブール空港が現れた。

---

2　Andrée Viollis, *Tourmente sur l'Afghanistan*, Librairie Valois, coll. « Explorations du monde nouveau », 1930, p. 14.

3　*Ibid.*, p. 19.

4　*Ibid.*, p. 35.

5　*Ibid.*, p. 40.

6　*Ibid.*, p. 44.

通りにも、並木の街道にも、なんという人だかり！　ターバンを巻いた明るい色の群衆が目まぐるしくうごめいている。私たちに向かって腕を上げ、銃を向け、叫びわめいている。私たちが到着したことで大騒ぎになったのは明らかだ。近づくにつれてすべてが明確になり、ついに私たちは地面を擦りながら停止した。

一群の人々が私たちの方に駆け寄り、蜂の群れのように飛行機をぐるりと取り囲んだ。キャビンのドアが開いた。私の連れの二人のアフガニスタン人は友人たちの腕の中に飛び込み抱きしめあった。私はめまいによろめき、褐色の手でつかまれながら、制服、黒い顔、微笑みに輝く眼を一瞬で見てとった。フランス語の心地よい響きが私の耳を打った。若い将校たちが言った。

「私はパリで操縦を学びました」

「私もです」

「私も……」

遠くの方に、敵意と嘲笑と侮蔑に満ちた険しい表情の者たちが見てとれた。なぜだろう？

しかし一台の車が群衆を割って近づいてきた。フェルト帽にブロンドの顎ひげのすらりとした男性が飛び降りると、蒼い顔で息を切らして大急ぎで私に会釈し、それ以上の挨拶もなしに私の手を取り引っぱっていった。

「急いで。街はまだ危険です……」

ソ連の代理公使のリクス氏だった。

一瞬ののち、私は車の奥に身を隠した。銃を構えた二人の山賊のような大男が、わめきながら両側のステップに立ち、別の二人が運転手の両脇に飛び乗った。私たちは全速力で脱出した[7]。

ヴィオリスはリポーターの一人称的視点を通して、着陸現場の混乱した状況をありのままに映しだす。歓迎と敵意の錯綜する緊迫した雰囲気の中で、彼女たちはソ連の代理公使によって強引に保護され、車でフランス公使館に連れてゆかれた。後から聞いたところでは、ソ連の外務局は数日前にヴィオリス到着の知らせを受けていた。彼らは最悪の事態を避けようと外国人への危害を禁じる布告を出したが、それでも一部の叛徒が飛行機に向けて発砲するのを止めることはできなかった。50発もの弾丸が発射され、一歩間違えれば大惨事になるところだった（以上第3章）。

7　*Ibid.*, p. 46–47.

## 動乱のただなかで

ヴィオリスが到着したフランス公使館は、アフガニスタンの外務省の建物の正面に位置していた。カブールを占領したハビーブッラー軍が外務省を拠点としたので、公使館は動乱を間近で目撃することになった。ヴィオリスはこの1週間の出来事を公使館員に問い尋ねる。10月7日、ナーディル・ハーンの軍隊がカブールを包囲して総攻撃を開始すると、ハビーブッラー軍はアルグ要塞に籠城した（以上第4章）。やがて両軍のあいだで攻撃の応酬が始まった。フランス公使館も戦乱に巻き込まれ、ナーディル軍の兵士たちの乱入を受けた。イギリスやドイツの公使館も被害をこうむった（以上第5・6・7章）。

アフガニスタンは習俗の異なる多様な部族のモザイクとして成立している。ナーディル・ハーンは王位簒奪者を倒すために多くの部族を結集することに成功した。問題はこうして生まれた国民的統一を今後も維持できるかどうかだ。「しかし憎悪と戦争から生まれたこの合意は、再建と平和をもたらすまで長続きするだろうか？　そしてこの新しい国民感情は、騒々しく独立心の強い異なる部族をしっかりとまとめることができるだろうか？[8]」ヴィオリスは軍の最高司令官シャー・ワリー（ナーディルの弟）に取材を申し込んだ。彼女が司令本部を訪ねると、警護の兵士たちは一斉に驚愕の表情を浮かべた。「私が近づくと、おしゃべりはやみ、顔が振り返り、驚愕と好奇に輝く視線が向けられた。かすれた驚きの声が交錯した。女がここに、こんな日に！しかも司令官に会うために！　このことは諸部族で長いこと語り草になるだろう[9]」。シャー・ワリーはヴィオリスに、自分たちが諸部族を説得して協力を得るまでにどれほど苦労したかを物語った。彼はこうして結成した軍隊とともに10月9日にカブールに入城した（以上第8章）。

ナーディル・ハーンはアマーヌッラー・ハーンと同じくバーラクザイ朝の王族で、アマーヌッラーは進歩的ナショナリストの急進派、ナーディルは穏健派に属していた。アマーヌッラーが即位すると、ナーディルは彼の下で国防相や在フランス大使を務め、その後フランスのニースで引退生活を送っていた。ナーディルは10月15日（ヴィオリス到着の2日後）にカブール入りを果たし、民衆の熱烈な歓迎を受けた。彼は宮殿で政治指導者や宗教指導者から王位に就くよう懇願され、数度の固辞の後にこれを承諾した（以上第9章）。

---

8　*Ibid.*, p. 103.

9　*Ibid.*, p. 104.

10月16日にナーディル・ハーンは大モスクで即位の演説を行った。彼は簒奪者に抵抗した民衆をねぎらい、自分に協力した諸部族に感謝の意を表した。異教徒がモスクに入ることは許されないので、当日ヴィオリスは車に乗って街の様子を見に出かけた。彼女が車で通ると、通りの群衆はこぞって非難の声を上げた。「何百もの顔が私たちの方に向けられた。焼けつくような何百もの瞳が私たちを見つめ、その表情は驚愕と愉悦から厳しい敵意、激しい憤慨へと変わった。西洋の連中、異教徒ども、しかも――なんと恥ずべきこと！――ヴェールなしの女がただ一人男たちに交じっているとは！[10]」（以上第10章）

ヴィオリスはここでアフガニスタンの歴史を振り返る。この国は古代以来、ギリシア人、フン族、アラブ民族など数多くの異民族の侵入を経験した。19世紀にはインドに進出したイギリスとの二度の戦争（第一次・第二次アフガン戦争）を経て、イギリスの保護国になった。国王のハビーブッラー・ハーンは近代教育、首都改造、軍隊改革などの近代化を進めることでイギリスからの独立をはかった。1919年に国王が暗殺されると、息子のアマーヌッラー・ハーンが叔父のナスルッラー・ハーンを追放して即位した。彼はイギリスに宣戦を布告（第三次アフガン戦争）、念願の独立を果たした（以上第11章）。

アマーヌッラーはヨーロッパ的な近代国家を目指して、工場を建設、交通・通信網を整備、教育制度を整え、文化の保護に乗りだした。宗教指導者らは王がイスラーム的伝統をないがしろにしていると批判した。王がさまざまな伝統的習俗を廃止し、女子教育を推進したことで、反体制派の反発が一段と激化した。1928年12月、「バッチャ・イ・サカーウ」（水売りの息子）を自称するハビーブッラー・カラカーニーが蜂起して首都カブールを占拠した（以上第12章）。ハビーブッラーはその通り名が示すように貧民階級の出身で、兵士を務めたのちに盗賊団を結成し、義賊として民衆の人気を集めた。彼はアマーヌッラーに不満を抱く反体制派に呼びかけ、反乱軍を組織してカブールを占領した。アマーヌッラーは反撃を断念してヨーロッパに亡命した（以上第13・14章）。

10月18日、ヴィオリスは即位したナーディル・ハーンと弟のシャー・ワリーに取材を行った。新国王は英語とフランス語を交えつつ、アフガニスタンの悲惨な状況を説明し、ヨーロッパ諸国に支援を求めた。ヴィオリスは彼の豊かな教養と静かな知性、そして波乱の人生の中で培った強い忍耐心に深い感銘を受ける。

10 *Ibid.*, p. 130.

明るく陽に焼けた美しい肌の上を憂愁に満ちた微笑が漂った。鼈甲の眼鏡の奥の眼は遠い昔を振り返るようだった。ひげは最近白くなったようで、痩せた頬には二本の皺が刻まれていた。西洋の穏やかな習俗や繊細で教養ある精神の交流に慣れたこの洗練された人物が、狂信に凝り固まった野蛮な諸部族の中で何か月も耐え忍んだ苦しみの日々に、私は思いを馳せた。彼は人生において、名誉の陶酔、失寵と亡命の苦しみ、そして勝利による国民の喝采を次々と経験した。おそらく彼は最高権力の虚しさと危険を嫌というほどわかっているので、それを望んだりはしなかった[11]。

フランス暮らしの長いナーディルは民主主義や男女平等の思想に親しんでおり、女子教育にも前向きだった。しかしそれは現在のアフガニスタンではあまりに危険な論点なので、ヴィオリスはあえてそれに触れようとはしなかった。「アマーヌッラーの失脚の原因の一つとなった女子教育については、私はあえて話題にしなかった。そんなことを考えるのは不可能であり、君主にとって気掛かりの一つだとわかっていたからだ[12]」。このように新国王は、西洋的な近代化とアフガニスタンの伝統のあいだで難しいかじ取りを迫られていた（以上第15章）。

10月末、ハビーブッラーとその一味が降伏したとの知らせが届いた。11月1日に彼らは銃殺に処され、遺体はカブール市民に対してさらしものにされた。こうして事件の顛末を見届けたヴィオリスはフランスへの帰途につく。カブール空港を飛び立った飛行機は一度は悪天候のため引き返したが、翌日には無事にヒンドゥークシュ山脈を越えてテルメズに着陸した。死亡したと思われていたヴィオリスの突然の帰還に人々は騒然とした。「私たちは熱狂的な歓迎を受けた。私たちが死んだという噂が広まっていたのだ[13]」（以上第16章）。

最後にヴィオリスは、アフガニスタンの今後の発展に思いを馳せる。ナーディル・ハーンは、苦労して築いた諸部族の統一を失うことなく、国家を持続的に運営しなければならない。そのためにはイギリスとロシアの政治的介入に警戒しつつ、イタリア・ドイツ・フランスとの提携を深め、外交関係を強化する必要があるだろう。とりわけフランスはこれまで教育的・文化的領域でアフガニスタンに多大な支援を行ってきた（フランス使節団による美術品の発掘など）。なぜなら「フランスはこの世界で平和と

11 *Ibid.*, p. 198.

12 *Ibid.*, p. 200.

13 *Ibid.*, p. 218.

文明化の使命を引き受け、それは常にフランスの存在理由と栄誉であるからだ[14]」。ヴィオリスはフランスの平和的支援によるアフガニスタンの再興を祈りつつ本書を閉じる（以上第17章）。

## 冒険家としての女性リポーター

ヴィオリスはアフガニスタンの動乱をどのように解釈しているのだろうか。「途方もない大事件、進歩と野蛮、東洋と西洋、中世の狂信と近代精神が激しくぶつかり合い、悲劇的で喜劇的、残忍で滑稽、『千夜一夜物語』とグラン＝ギニョル劇を同時に思わせるような、未曽有の大事件がここ数か月アフガニスタンで展開している[15]」。ここにはヨーロッパが近代と進歩を、アジアが中世と野蛮を象徴するという、近代ヨーロッパ人のオリエンタリズムを特徴づける明快な善悪の対立の図式が見てとれる。ナーディル・ハーンはヨーロッパがもたらした近代文明の恩恵を、ハビーブッラーはアジアの野蛮な力がもたらす災厄を体現し、アフガニスタンは両者の衝突の舞台として示される。

ヴィオリスは、フランスが「平和と文明化の使命」を果たすことでアフガニスタンの発展に貢献することを提案する。ここにはたしかに、新興国の平和的発展を願うヴィオリスの真摯なコスモポリタニズムが認められる。とはいえ「文明化の使命」という言葉が、当時の植民地主義の専横的支配を覆い隠す常套句であったことを忘れてはならない。アリス＝アンヌ・ジャンデルが指摘するように、ヴィオリスはヨーロッパ列強の植民地主義については終始曖昧な態度を取りつづけた。彼女はイギリスやフランスの植民地支配の苛酷な実態を激しく糾弾したが、決して植民地制度自体の廃止を提案しようとはしなかった。「同時代人の中には、アンドレ・ヴィオリスが『反フランス的行為』を行っていると言う者もいた。しかし彼女は植民地主義の原理を問題にしたわけではない。リポーターは、植民地開発を行うやり方を攻撃したが、インドシナの独立やインドの独立を推奨したわけではない[16]」。その意味でヴィオリスの提案に、アフガニスタンに対する政治的影響力を拡大しようとするフランス・ナショナリズムの発露を見出すことも可能だろう。

ルポルタージュの叙述スタイルとしては、本作はリポーターを主人公とする一つの

14 *Ibid.*, p. 235.

15 *Ibid.*, p. 7.

16 Alice-Anne Jeandel, *Andrée Viollis : une femme grand reporter. Une écriture de l'événement 1927–1939*, L'Harmattan, 2006, p. 71.

冒険譚として緻密に構築されている[17]。アンヌ・ルヌーが指摘するように、現地に到達するための旅程の困難、内乱のただなかで取材することの危険性、すべてがこの取材の冒険的性格を高めるはたらきをしている。「このルポルタージュは最初から最後まで、飛行機の快挙とジャーナリズムの偉業の入り混じった冒険譚の形式をとっている[18]」。すでに見たように、ヴィオリスはさまざまな人の口を借りて取材の危険性に繰り返し言及することで、物語の緊張感を高め、それが最大の効果を生むように配慮している。

リポーターが女性であることが、この取材の冒険的性格をさらにきわだたせる。当時、女性ジャーナリストはまだ稀少な存在であり、1930年代におけるその割合は約2パーセント、1939年における女性のジャーナリスト免許所持率は3.5パーセントにすぎなかった[19]。それゆえに世界を駆けめぐるヴィオリスの姿は、そのエレガントな格好とエネルギッシュな行動のギャップも相まって、読者に鮮烈な印象を与えた。「実際、アンドレ・ヴィオリスについて書かれた記事や、彼女のルポルタージュの単行本のいくつか（とりわけ『アフガニスタンの動乱』）に添えられた写真を見ると、そこにいるのはとても女性的な小柄な婦人で、世界を駆けめぐる戦闘的なジャーナリストという感じはまったくない……[20]」。

マリー＝エヴ・テランティが指摘するように、ヴィオリスは自らの性別を誇示するタイプのジャーナリストではなかったが、常に女性の社会的地位に関心を抱き、性別に関する周囲の反応に注意を払っていた。そのことが結果的に彼女自身の性別に光を当て、女性による取材活動が当時どれほど特殊なことだったのかを浮かび上がらせる。「アンドレ・ヴィオリスはプロ精神を掲げ、できるかぎり自らの性を打ち消そうとするかに見える。しかしこの全体的な中立性ゆえに、彼女が訪ねた人々がときに示す女性蔑視の乱暴な反応は、彼女が女性として例外的な存在だということを読者に唐突に

17 そもそも冒険という主題自体、植民地主義との親和性がきわめて高い。シルヴァン・ヴネールが指摘するように、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのフランスにおける冒険趣味の流行は、同時代の植民地主義政策によって後押しされていた。「冒険のテーマは実際に政治的目的、それも二つの主要な目的のために用いられた。すなわち、植民地政策を擁護することと起業家精神を育成することである」（Sylvain Venayre, *La gloire de l'aventure. Genèse d'une mystique moderne 1850–1940*, Aubier, 2002, p. 85）。

18 Anne Renoult, *Andrée Viollis. Une femme journaliste*, Presses de l'université d'Angers, 2004, p. 102.

19 Jeandel, *op. cit.*, p. 7 et p. 22.

20 *Ibid.*, p. 49.

映しだす[21]」。司令本部にシャー・ワリーを訪ねたさいに兵士らに驚かれたエピソードや、ナーディル・ハーンが大モスクで即位演説を行った日に通りの群衆に罵倒されたエピソードは、ヴィオリスの取材活動が当時の習俗にとってどれほどスキャンダラスなものだったかを如実に示している。

このアフガニスタン取材は、二度にわたるヒンドゥークシュ山脈越えによって前後を区切られている。往路の飛行（第3章）で、山脈を越えるために急上昇する飛行機の中でヴィオリスは奇妙な仮死状態に陥るが、これは未知の世界へ入るための一種の通過儀礼を示している[22]。それゆえに復路の飛行（第16章）は、死の国からの帰還を意味することになる（テルメズでは実際に彼女の死の噂が流れていた）。神話の英雄たちのようにこの快挙を成しとげたヴィオリスは、飛行士から男性以上に勇敢な存在として称えられる。「飛行士にとってもヒンドゥークシュ越えは大変な快挙です。[…]男でもなかなかあなたのように落ち着いてはいられないものだ！[23]」こうしてルポルタージュは女性リポーターの冒険譚として完結し、そこではヴィオリスの取材活動そのものがフェミニズム的な意義を獲得するにいたる。

最後に、その後のアフガニスタンの歴史を概観しておこう。ナーディル・ハーンのような開明的な君主にとっても、アフガニスタンの復興は容易な仕事ではなかった。彼はアマーヌッラー・ハーン時代の近代化路線を抑制し、イスラームの伝統を尊重する姿勢を示さざるをえなかった。彼は近代的な議会制を整える一方で、教育をイスラーム法学者の手に委ねるなど、妥協を重ねつつ内政を整えた。しかしその過程で排除されたハザーラ人の恨みを買い、1933年にハザーラ人学生によって暗殺される[24]。

その後もアフガニスタンで紛争が絶えることはなかった。20世紀後半から21世紀初頭にかけてのアフガニスタンの歴史は、外国による侵攻と数々の内戦で覆いつくされている。2021年にアメリカ軍が20年にわたる軍事介入を終えて撤退し、第二次タリバン政権が樹立されたが、いまだに国際的な承認は得られていない。そこではイス

---

21 Marie-Ève Thérenty, *Femmes de presse, femmes de lettres. De Delphine de Girardin à Florence Aubenas*, CNRS Éditions, 2019, p. 334.

22 ジャンデルはこの飛行自体が女性解放を象徴していると解釈する。「このセンセーショナルでメディア化された飛行を女性解放の象徴と見なすのはやりすぎかもしれない。しかしヴィオリスは当時のフェミニストで、この旅行の例外的な性格を意識していた。彼女は、女性もこのような快挙を――URSS-38の操縦士によれば男性よりうまく――企てることができると示したのだ」（Jeandel, *op. cit.*, p. 172）。

23 Viollis, *op. cit.*, p. 219.

24 内藤陽介『アフガニスタン現代史』えにし書房、2022年、第2章を参照。

ラーム教に基づく勧善懲悪省の支配のもと、女性の権利は厳しく制限されている。女性ジャーナリストによる取材活動も困難となり、「国境なき記者団」は2021年8月31日に「8月15日以前にカブールにいた700人の女性ジャーナリストのうち、現在も活動しているのは100人未満である[25]」と報道した。アフガニスタンの政治状況は百年後の今もなお不安定な状態にあり、ヴィオリスが直面した女性蔑視は現在も続いている。その意味で、ヴィオリスが提起した問題は今日の世界の問題であり、彼女のルポルタージュはアクチュアリティを少しも失っていないといえる。

## 付記

本論文はJSPS科研費24K03782ならびに2025年度南山大学パッヘ研究奨励金I-A-2の助成による研究成果の一部である。

25 « Sur 700 femmes journalistes à Kaboul avant le 15 août, moins de 100 sont encore en activité », *Reporters sans frontières*, publié le 31.08.2021 et mis à jour le 01.09.2021 (consulté le 16 janvier 2026). https://rsf.org/fr/sur-700-femmes-journalistes-%C3%A0-kaboul-avant-le-15-ao%C3%BBt-moins-de-100-sont-encore-en-activit%C3%A9